

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) かんきつ類の仕上げ摘果・樹上選果</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かんきつ類の仕上げ摘果・樹上選果 ○極早生、早生温州みかんの収穫 ○かんきつ類の夏秋梢管理 ○極早生・早生温州の秋肥施用 ○かき、キウイフルーツの収穫 <p>1か月予報では、平年同様に晴れの日が多く、気温が高い見込みである（高松地方气象台9月21日発表）。</p> <p>温州みかんにおいては、仕上げの時期を迎えるため適期管理を行い、夏秋梢管理や施肥管理など次年度に向けた作業も進めていく。</p> <p>ア 温州みかん 収穫間近となっている温州みかんでは、樹上選果で商品性が劣る果実を除去する。普通温州で、後期重点摘果を行っている園では、10月中旬をタイムリミットとし、果皮表面が滑らかになり光沢を持つようになってからの仕上げ摘果を心がける。仕上げ摘果は、上向きの大玉果や小玉果、日焼け果や傷果などを除去する。着果が少ない樹では、仕上げ摘果は行わず、樹上選果を行う。</p> <p>イ 中晩柑類 摘果で見落とした直花果、日焼け果、腰高果、果梗枝の太い極大果、極小果、傷果などを除く。着果が多い樹では最終的に樹上選果を行って、着果量の調整を行う。なお、「甘平」では裂果した果実が腐敗し、隣接果の腐敗を誘発するため、裂果した果実は結果枝の基部から除去する。</p>
<p>(2) 極早生、早生温州みかんの収穫</p>	<p>園地ごとに定期的な果実分析を行い、着色や糖度、クエン酸のチェックを行い、分割採取による品質の均一化を図る。収穫の際は、果実にハサミ傷をつけないように注意するとともに果実の取り扱いを丁寧に行うなどして腐敗果の発生を減らす。</p> <div data-bbox="959 1697 1380 2004" data-label="Image"> </div> <p>写真1 収穫期の温州みかん</p>

項 目	作 業 内 容																									
<p>(3) かんきつ類の夏秋梢管理</p>	<p>夏秋梢は樹勢の強い樹や着果の少ない樹に多くみられ、放置すると同化養分が夏秋梢の伸長に使われ、果実肥大の抑制や品質低下、耐寒性の低下が懸念される。園や樹の着果状況、夏秋梢の発生状況を見ながら、平均気温が20℃以下となり秋芽の発生が少なくなる10月中旬以降を目安に以下の管理を実施する。</p> <p>ア 夏秋梢の強い立ち枝、樹冠内返り枝は基部から除去する。</p> <p>イ 角度が45度以内の夏秋梢は、夏と秋の境のコブの上で切り返し、春枝を発生させる。</p> <p>ウ 柔らかい樹作りのため、日照条件を考慮して、夏秋梢は50～60%程度残す。</p> <p>エ 春枝から夏秋梢が多く発生している場合は、1本だけ残し、残りは除去する。</p> <p>オ 弱い夏秋梢はコブの下まで切り返し、充実した春枝を発生させる。</p> <div data-bbox="475 929 1380 1153" style="text-align: center;"> </div> <p style="text-align: center;">図1 かんきつ類の夏秋梢管理</p>																									
<p>(4) 極早生・早生温州の秋肥施用</p>	<p>果実生産で消耗した養分を補給し、樹勢回復や耐寒性向上、翌年の花芽分化を促すため、収穫期の前後で秋肥を施用する。秋肥は施用時期が遅くなると、地上部器官への移行が遅れるが、地下部器官へは吸収され、翌春の新梢・花蕾の形成に寄与することから、適期を逃した場合は即効性の化成肥料等を施用する。</p> <p>極早生温州は、収穫直前の10月上旬(10月中旬までに大部分収穫することを前提)と収穫後の11月上旬に分施して樹勢回復を図る。早生温州では果実の収穫を11月中旬までに終えるものとして、収穫最盛期の約3週間前に施用する。また、収穫後、窒素成分主体の液肥の葉面散布を数回行い、早期の樹勢回復を図る。</p> <p>表1 極早生・早生温州の秋肥・晩秋肥施肥基準 (愛媛県施肥基準)</p> <table border="1" data-bbox="475 1839 1385 2078"> <thead> <tr> <th rowspan="2">品種名</th> <th rowspan="2">目標収量 (t/10a)</th> <th rowspan="2">施肥時期</th> <th colspan="3">施肥成分量 (kg/10a)</th> </tr> <tr> <th>窒素</th> <th>リン酸</th> <th>カリ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">極早生温州</td> <td rowspan="2">4</td> <td>10月上</td> <td>8</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>11月上</td> <td>5</td> <td>3</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>早生温州</td> <td>4</td> <td>10月下</td> <td>11</td> <td>7</td> <td>7</td> </tr> </tbody> </table>	品種名	目標収量 (t/10a)	施肥時期	施肥成分量 (kg/10a)			窒素	リン酸	カリ	極早生温州	4	10月上	8	6	6	11月上	5	3	3	早生温州	4	10月下	11	7	7
品種名	目標収量 (t/10a)				施肥時期	施肥成分量 (kg/10a)																				
		窒素	リン酸	カリ																						
極早生温州	4	10月上	8	6	6																					
		11月上	5	3	3																					
早生温州	4	10月下	11	7	7																					

項 目	作 業 内 容
<p>(5) かき、キウイフルーツの収穫</p>	<p>ア かきの収穫</p> <p>かきの果実は、完熟に至るまで肥大と着色、成熟が進むことから早採りは避け、十分に着色した適熟果を収穫するよう心がける。また、収穫時に果皮に傷をつけないように注意する。さらに、濡れた果実を収穫すると汚損果の原因となることから乾いた状態の果実を収穫する。</p> <p>果実の着色を促進する方法として、反射マルチの設置が有効であり、樹冠下に反射マルチを敷くことで、秀品率の向上や汚損果の発生防止にもつながる。また、マルチの効果を高めるためには新梢管理を徹底し、樹冠内部の日照条件を改善することが重要である。</p> <p>イ キウイフルーツの収穫</p> <p>果実の糖度は、これまでのデンプンの蓄積量と収穫1～2か月前の樹体の水分ストレスによって左右されるため、10月にはかん水を控え、乾燥ぎみに管理する。ただし、落葉させると逆効果になるため、</p> <p>写真2 収穫期のかき</p>  <p>写真3 収穫期のキウイフルーツ</p>  <p>樹の様子を十分観察しながら対応する。</p> <p>収穫期の目安としては、未追熟果の糖度が6.5以上になってから収穫を開始する。なお、果実の貯蔵中における腐敗病害の発生を防止するため、収穫前に貯蔵病害防止の薬剤散布を果実全体に十分かかるように必ず行う。</p>

(作成:果樹研究センター)